ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第138号（２０１７年11月）

風に吹かれて（115）

白井啓治

・この冬は如何にと雀らに聞くもチュン

この秋は実に不愉快な秋であった。自然界の陽気が沈んでいると人間社会の雰囲気も沈み込んで、不愉快なことばかりが起こるようになるのだろうか。残り少なくなってきた人生なのだから、愉快に笑って過ごしたいものだと思っているのだが、あまりにも愉快の乏しい世の中であることか。

愉快がないことで思い出したが、以前「笑いの心理」という話を読んだことがある。

人が笑うというのは、他人の不幸を見た時だという項があった。確かに人が大声を出して笑う場面というのは、他人が失敗をした時、ドジを踏んだ時、莫迦なことをやった時等々、思いつく笑いは全て他人の不幸を目にしたときである。どうやら人間の笑いというのは、その文献のいうように、笑いというのは自分が優位に立てる心理状態の時に出てくるもののようである。

勿論反対意見もあるだろう。親が我が子の仕草を見て笑うのは可愛いからで、不幸を喜ぶのではないというだろう。しかし、卑下こそしないが、そこにはドジであったり上手くいかない失敗であったりがあり、それが如何に愛情豊かに頑張れ頑張れの応援であったにしろ、笑うという行為の深層心理の中には、他人の不幸に対して優位性をもって笑うのと同次元のものがあるだろうと思う。

訳の分からぬ衆院選挙の結果に万歳をして高笑いの大騒ぎを報じるニュースを見ながら、笑いの心理なる文献を思い出した。勝った勝ったと満面の笑みを見せるのは、落選者をざまあ見ろ、と優越感に浸っているのかもしれない。それはともかくとして実際のところ勝ち馬に乗ることばかりを考えている連中に国のかじ取りなどできるのだろうかと思ってしまうのは、この老いぼれ一人ではないだろう。

現実の国会を見ると、民主主義における選挙というのは、数の力の争奪戦ではないのであるが、議席の数こそが力とばかりに「赤信号、皆で渡れば怖くない」をやっている。世も末ということか。

当ふるさと風の会の打田升三兄が、数年にわたり「平家物語」「将門記」「太平記」の私訳に取り組んでおられ、現在太平記の巻6まで進んでいる。太平記は、南北朝時代を舞台にして後醍醐天皇即位から足利二代将軍の死去と細川頼之の管領就任までの約50年間の軍記物語である。日本史の中で最も興味深い時代の話ではあるが、武家政治の確立期でもあり人物の絡みがなかなか難しく、難解な時代である。

打田兄の太平記巻6の私訳を読んでいたら、朝日新聞に興味深い記事が出ていた。日本史を二分するのは「北条時代」だ、の見出しで、保立道久氏の主張する明治以前の時代区分の見直しについてを紹介するものであった。非常に面白いものであったので、主張されている時代区分だけ紹介してみたい。詳しくは氏の著書を読まれることをお勧めする。

古墳時代から明治以前の時代区分は、一般的に弥生・古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代、江戸時代と認識されている。これに対して、保立氏は、大きく西国国家時代と武家国家時代に二分し、西国国家は、古墳時代、大和時代、山城時代とし、武家国家は、北条時代、足利時代、織豊時代、徳川時代とすべきではないかと主張されている。

新聞には、その論拠の概要が紹介されている。ここでそれの全てを紹介することはできないが、大和、山城、北条、足利、織豊の時代区分は、歴史に詳しくはない小生にもなるほどと納得のいくものであった。

このような主張が発表されると、受験勉強の暗記で覚えた人たちには強い違和感を覚え、「何だこれは！」と大反発するかもしれないが、受験勉強ゼロの小生などには、確かにこういう時代区分もありだな、と素直に入って来る。

この新聞記事を読みながら、今更のように打田兄が始められた太平記の私訳への挑戦は、ただただ頭が下がると同時に、打田ファンとしてその完結を期待するものである。

地域に眠る埋もれた歴史（32）　木村進

茨城廃寺・舟塚山古墳方面（5）

13、三光の宮―　天平時代のトラウイアングル

石岡には日天宮、月天宮、星之宮という三光の宮なるものがある。

（三光の宮のトライアングル）

歴史は１３００年程前からあるともいわれ、かなりの古社と思われるが、あまり紹介されることは少ない。特に、星之宮は現在なく、総社宮に合祀されている。この三つのお宮が三角形に結ばれトライアングルを形成していた。昔にこのお宮をこの位置に配置したことは、何か意味を持たせていたはずで今では考察もされていない。

江戸時代に水戸街道（陸前浜街道）ができ、明治に鉄道が敷かれ、昭和になって国道６号線が開通したのである。鎌倉時代の前にはどのような道があったのだろうか。　三村から中津川で恋瀬川をわたり、田島の方を通って、日天宮と月天宮（貝地）の間を抜けるような道があったのかもしれない。

常陸府中の町は今から１３００年前の天平時代（奈良時代）の国分寺建設時期より始まっているが、この日天宮（国府七丁目）、月天宮（貝地一丁目）と星之宮（府中五丁目）はともに同じ時代に創建されたと見られている。日天宮は太陽の神「天照大神（あまてらすおおみかみ）」を祀っており、月天宮は天照大神の弟「月読尊（つきよみのみこと）」を祀っている。この二つのお宮は石岡（府中）の町の東西の入口に位置しています。これは鹿島神宮と香取神宮が霞ヶ浦（古代香取の海）の左右入口を守る位置に配置されているのと似ています。

鹿島・香取神宮に息栖神社を加えると強烈なトライアングルが出現することは良く知られていますが、こちらの日天宮、月天宮と星の宮を結んでもトライアングルが出現します。これは、星の宮が北斗七星を祀る神社で北極星の方向を意識して配置されたものと考えられます。北極星は常にその見える方向が変らないため、天平時代の人たちにとって、太陽・月に次いで信仰の対象となったものと思われます。

街灯などの明かりがほとんどない時代に、夜空を見上げた時の星の動きなどにも敏感であった当時の人々の暮らしが偲ばれるようです。民間信仰として祭られてきたため、規模は大きくないがそれぞれ長い間地域に支えられてきたことが感じられます。残念ながら星之宮は、常陸総社宮に合祀され、現存していないが、地名が残っています。

①　日天宮（にちてんぐう）石岡市国府七丁目４番

古くから、太陽、月、星は人々の信仰の対象となっていたが、常陸国衙が置かれた石岡には、それらをまつる社殿として、日天宮、月天宮（貝地一丁目）、星の宮（府中五丁目）が創建された。のちにこの三社は「府中三光宮」と呼ばれるようになったが、現存するのは、この日天宮と月天宮で、星の宮は地名にその名を残すのみである。日天宮の祭神は、天照大神（あまてらすおおみかみ）で、現在大小二つの鳥居と間口5.4ｍの社殿、裏には奥の宮がある。また、日天宮が古くからこの地域の人々の信仰をあつめたこともあって、本殿左には間口3.6ｍの稲荷大明神、右には御岳（おんたけ）神社がある。

（現地案内板より）

大小二つの鳥居と稲荷大明神

日天宮は国道から旧道に入ってすぐにある。６号国道を土浦方面から進み、恋瀬川を渡ってすぐ

に、石岡市街方面（旧水戸街道）へ斜めにいったすぐ先にまた斜めに入る細い道があるが、この道の左側にある。入口に二つの鳥居があるが、その左右は家の軒が迫っている。

② 月天宮（がってんぐう）石岡市貝地一丁目2番

月天宮の祭神は月読命で、本殿は間口6m、奥行5.5m、参拝口は間口2.1m、本殿のうしろには、参拝口と同じ大きさの奥の宮が張り出しになっている。また境内には、月天宮が古くからこの地域の人々の信仰を集めたこともあって、子安観音堂、弘法大師堂などがある。大師堂には、念仏講中の老人たちが家々を回って数珠を繰り、念仏往生を祈願したという「百万遍数珠」が保存されている。

（現地案内板より）

③ 星の宮・石岡市府中五丁目

星の宮は、現在はなく地名のみ残る。昭和36年発行の図説石岡市史（石岡市教育委員会編）によれば、星の宮は近年まで、香丸町の氏神として祭事が行なわれていたとのことで、香丸町に「星野宮記録」があり、徳川時代を偲ぶ好資料とのことですが詳細は不明です。また、神社としては総社宮に合祀された。

市制30周年記念「石岡の歴史」によると、星之宮は、北斗七星を祀る妙見信仰のお宮であり、かつて在庁官人が祭典を執行したと伝えられるが、近世以降は香丸町の商人たちの講によって祭事が行なわれたという。講は3月15日を祭りの日と定め当番が行事を運営し、その当番が講の記録としてその年の市内の出来事などを記録していた（香丸日記）。現存する記録は嘉永5年以降のみであるが、諸物価や景気の動向、異国船渡来情報、若松町の仇討ち、五品江戸廻送令、井伊大老暗殺、天狗党騒動などが記されている。と書かれている。

常陸総社宮に合祀された星之宮。内部に屋根などが朽ちた小さなお宮が見える。総社の随神門をくぐったすぐ右側に建てられている。

14、護身地蔵

護身地蔵（ごみじぞう）は6号国道の貝地交差点のすぐ近くに隠れるように建っている。国道建設時に現在の場所に移されたものである。土浦方面より6号国道を石岡方面に進み、貝地交差点を過ぎたすぐ左側である。よく見ていないと見落としてしまう。

この地蔵尊の謂れは戦国時代にさかのぼる。縁日は旧暦7月24日で、野菜などの屑を奉納し、この地蔵を参拝すると風邪が治るとの噂で参拝客がやってくるという。願いが叶うと、わらの納豆つっこに、やさいのくずなどのごみを詰めて奉納する。

これは塵芥（ごみ）と護身（ごみ）のことばが相通じるところからきているのだといわれる。むかし戦で難をのがれた武士が寄進したという石の地蔵尊でがあったそうだが、昭和4年の大火の際に破壊され、今は木製に変っている。

この護身地蔵尊は、6号国道の建設時に道路に掛かったため、少し西に移動され現在の国道脇に建っている。

昭和4年の中町の大火が風の影響でこの貝地方面に火が走ったため、この地蔵堂も火災にあった。

民族芸能の話（6・7）

木下明男

9回続いた《日本音楽の話》は終了し、今度は、労音の中で学んだ《民族芸能の話》について紹介いたします。日本音楽の話も今回の民族芸能の話も、タカクラ・テル先生から教えて頂いたお話しです。

私は昭和40年代、品川区の大企業（NIKON）で働いていました。

会社に入社した頃は、60年の安保闘争の真っただ中でした。その頃、安保闘争の中で団結力を身につけた労働者は、みんなが持っている諸要求を実現させ、明るく働ける職場になっていました。諸々のサークル活動も盛んでした、私も其の頃先輩から誘われ労音の活動に。

それから間もなく、組合弱体化政策の一環として、新賃金制度（会社職制の強化）導入が計られ、組合の分裂策動が行われました。会社側の組合分裂策動により、人間関係や様々な愛憎を経験した私は，社会のあり方に興味を持ち始めました。そんな折り、サークルの代表として、労音の地域活動に参加するようになりました。北海道函館労音との交流会に参加したのもこの頃で、生涯をかけて音楽運動に参加するきっかけにもなりました。そして、何のために音楽運動を進めるのかの勉強が始まります！そんな時に学んだテキストから…。

（6）第二次世界大戦後の日本文化の更に新しい条件

敗戦によって、日本の社会に大きな変化が起こった。変化には、良い面と悪い面の両方があり、良い面は絶対主義的天皇制が崩壊し民主主義の道が開かれ、土地改革が行われ封建的要素が大きく取り除かれた事。悪い面は民族の独立を失って、アメリカ帝国主義の支配を受ける事になった事。言うまでもなく後者の方が最も重要です。一方では、封建的要素が取り除かれて、近代民族として成長できる道が新しく開かれたと同時に、もう一方では外国の支配を受けて、民族の正しい発展を防ぎ止める、非常に大きな条件が新しく作り出された。今は前の条件より後の方が大きく作用している。

文化の面でも全く同じで、天皇制が戦前の文化を指導していた二つの方針、極端な国粋主義と極端な外国崇拝のうち、天皇制が崩壊すると共に、国粋主義はすっかり力を失って、外国崇拝だけが残りアメリカの支配に乗って、力を強めた。この条件を利用して、アメリカ帝国主義は、戦前から日本の文化に大きな害毒を与え、退廃的な「世界主義」（コスモポリタニズム）の文化を怒涛の様に流し込んだ。テレビ、ラジオ、劇場、印刷物、その他に溢れている、エロ・グロ・ナンセンス。勤労者は一日の労働を終わって、家に帰った後、テレビを見て一冊の週刊誌を読むと、何も読む時間や考える時間が全くなくなる。アメリカ帝国主義は日本人民の民族意識と階級意識の高まりを何よりも恐れている。人民の意識が高まれば、日本に対する支配を続ける事が出来なくなるからです。それで、日本人民の民族意識と階級意識を眠り込ませるため全力を挙げているのが、帝国主義の植民地文化なのです。これは、日本の文化に初めて起きた新しい条件です。民族文化の正しい発展は防ぎ止められ、民族文化を正しく発展させようとする日本人民の熱情は眠り込まされます。日本民族がアメリカ帝国主義の侵略を受けているように、日本の民族文化もまた文化的な侵略を受けている。日本民族が危機に陥っているように、日本文化もまた危機に陥っている。

（7）現在の文化運動の任務

嘗て、日本の資本家階級は、封建勢力と一緒になって、極反動の絶対主義的天皇制を作り上げ、アジア諸国を侵略するために，国内の勤労人民に野蛮な弾圧を加え、民族文化の発展を防ぎ止めると言う、最も反民族的な政策を続けてきた。今また、民族をアメリカ帝国主義に売り渡し、民族文化を植民地主義の餌ににして滅ぼそうとする、売国的な政策をとっている。今の日本民族の危機も、全てこれら売国主義者の資本家階級が作り出した。民族文化の危機を解決し、正しくこれを指導できるのは労働者階級しかない。

日本労働者階級の前衛、共産党は今の日本民族の当面している問題を解決するには、アメリカ帝国主義と日本の独占資本の二つの敵の支配を倒す、反帝・反独占の人民の民主革命が絶対に必要であることを明らかにした。同時に、文化の面では、アメリカ帝国主義の植民地主義と戦って民族文化の伝統を守り育てなければならない事を明らかにした。既に警職法反対闘争以来、日本人民は反帝・反独占の人民の民主革命の方向に向かって大きく運動を展開してるが、それには多くの愛国的な文化人が参加している。

日本人民の愛国的な戦いが全世界の勤労人民の支持を得ているように、アメリカ帝国主義の植民地主義と戦う日本の文化人の愛国的な文化運動も、また大きく全世界の民主的な文化人と結びつき、深く支持を受けている。１９５５年、インドネシアのバンドンで、日本を含むアジア・アフリカ２９ヶ国の代表が会議を開き、アメリカを中心とする帝国主義の植民地主義と戦って世界の平和と民族の独立を守るという事を決議した。（バンドン会議）この決議に基づいて、１９５８年ウズベック共和国のタシケントで、アジア・アフリカ作家会議の第一回大会が開かれ、日本の代表も参加して、植民地主義と戦う坂の任務について決議した。続いて、１９６１年東京で、アジア・アフリカ作家会議の臨時大会が開かれ、益々植民地主義との戦

いを発展させる必要性を確認した。同年の１２月に、アジア・アフリカ作家会議の第二回大会がカイロで開かれ、それにはラテン・アメリカの作家も参加することになった。こうして、帝国主義の植民地主義と戦う文化運動は、労働者階級の指導の下に、良心的な全世界の文化人の連帯責任になっている。

我々は民族文化の無限に豊かな素材を持っている。この貴重な素材の大部分は、まだ地下に埋もれているので、まずこの素材を見つけ地下から掘り起こします。しかし、素材はあくまで素材であって、それ自体が民族文化ではない。素材を民族的なものに引き上げるには、芸術的な独創を加えなければならない。何が民族文化の素材で、どうすればそれを民族的なものに引き上げられるかという物指は、労働者階級だけが持っている。民謡を取り扱う流行歌手の態度と、わらび座や民族歌舞団の態度とを比べてみればはっきりわかります。流行歌手は、民謡と言う民族文化の最も大切な素材に、世界主義（コスモポリタニズム）と言う植民地主義の毒素を駐車して、民族的要素を殺している。わらび座や民族歌舞団は、労働者階級の愛国主義に基づいて、民族的要素を生かし大きく発展させている。民族文化の素材は、民族の宝であると共に、人類全体の宝でもある。今の世界では、労働者階級だけが、この宝を民族文化に引き上げ、人類的な文化に引き上げる力を持っている。労働者階級は、こうして民族性と国際主義とを統一している。労働者階級の立場に立って、民族文化の正しい発展のために全力を挙げる。そして、そのための最も大きな妨げであるアメリカ帝国主義の植民地主義と徹底的に戦う、これが今の文化運動の中心任務です。わらび座や民族音楽運動を進めている者たちは、そういう任務を極めて忠実に実行しているし、これからも一層忠実に実行されると信じます。

（おわり）

悲喜こもごもの回顧録⑴

菅原茂美

２００７年11月「風の会」に入会。12月に私の第1号を皮切りに、以後毎月投稿を続け、早くも10年過ぎた。16年3月第１００号を記念しこれまでに書いた全てを纏め『遥かなる旅路』と題し、上下巻に分け刊行した。以後も独善と偏見を顧みず、信ずるところを述べまくってきた。いい年をしてなかなか丸くはなれず、尖りっぱなし。人間、長く生きてりゃ、喜びに胸躍ったり、悲しみに泣き濡れたりの、つづら折り。

『上を向くより、足元をしっかり見つめよ』と、古来先人達の言葉だが、そういう意味において、自分史を顧み、主な出来事を並べ、それぞれが、自分の人生において、どんな意味を持っていたかを顧み、自分の記録として、孫や曾孫のために残しておきたい。

【まずは自己紹介：昭和10年4月10日生まれ。生家は岩手県ながら旧伊達藩。現在の奥州市。正宗は幕府の目を逃れるため、奥座敷の旧水沢地方に西洋文化を押し込め、隠れキリシタンが根強かった。米どころ胆沢平野は、慶長年間後藤壽庵によるオランダの水利工学導入。水沢からは高野長英、後藤新平、斎藤実首相などを排出。

我家の初代・祖父（明治7年生れ）は庄屋の分家。米作中心の農家ながら学問が好きで独学。幕末～明治の本が何冊かある。農閑期には村の青年達が我家に集まり、寺小屋式で講話をしていたという。父は「超」が付くほどのお人好し。両親の大きな声を私は一度も聞いた事がない。私は7人兄弟姉妹の次男坊。賢兄愚弟の典型例。いつも劣等感。昭34・岩手大学獣医学科卒】

＊

① 6歳：「命拾い」・松の木伐採事故

波乱万丈の幕開けである。6歳で黄泉（よみ）の世界を覗いた臨死体験。単なる脳震盪なのか夢なのか不明。しかも、何の知識も、経験もないのに華やかな「あの世」を見てきた感じがする。この世に「神」が存在するかどうか、今この年をしてもよくわからないが、幼い私の体験から、お地蔵さんに命を助けてもらった感じがする。

その体験とは、小学校入学直前、父と父の友人（H氏）の二人で、地主に頼まれ近隣の松林の伐採をしていた。私は父の後をくっついて行き、松ボックリなど拾って遊んでいた。父は離れた所の別の木を倒していたが、H氏は私が遊んでいるすぐ傍の木を倒していた時、子供は父親の方にいると思い、自分の傍にいるのを全く気付いていなかったらしい。伐採した大木（直径約45㎝）は真っすぐ私の頭の上に倒れてきた。ギャーと泣いてそのまま気を失っていたという。普通ならそれで私の人生は終わり。ところが運よく、先に倒しておいた大木が真横にあり、今倒した大木は丁度十文字にその上に重なり、私は三角形の空間にすっぽり嵌まる形で、意識を失っていたという。頭部にかすり傷があるだけで、他に傷も出血もなし。ただ気絶しているだけ。後から聞いた話だが、父は驚き、私をおんぶして、まず我が家に駆け込んだ。医者に行くにも、勿論自動車などない時代。最速手段

は、おんぶして馬を飛ばすほかない。馬を引き出し、準備をしていたら、突然私は覚醒したという。

ところが私は、父が現場から家へ走る途中、父の背中で夢を見ていたようだ。黄色い花が全面に咲く花畑の隅に、石の地蔵さんが立っており、手を合わせ、何やら夢中で拝んでいた…。目が覚めるなり、『黄色い花は？　お地蔵さんはどこ？』と周りの大人達に問いかけたという。大人達は、私が話した夢の内容を知り、後々まで、そのお地蔵さんに命を助けてもらったんだね！と話していた。

花畑とかお地蔵さんとかを6歳の私は、それまでに見た事も聞いた事もなかった。未体験の事を夢に見る…それは有りうる事だが幼齢ながら、無意識の信仰の芽生えか？　又は自分の弱さの象徴「苦しい時の神頼み？」。いずれにしろ夢に現れた黄色い花畑と、お地蔵さんは、80歳過ぎた今でも、明確に覚えている。

＊

② 10歳：終戦前後（学校が兵舎・疎開）

一体これは何事だ？　次世代を担う若者を教育する学校を、兵隊に踏みにじられたとしか言いようがない。私は小学4年生が終戦である。終戦のほぼ1年前から私の通う小学校は、完全に兵隊により占拠。その為、学校は時々米軍艦載機の機銃掃射を受けていた。やむなく学校に近い大きな農家の座敷が教室となった。今思えば8畳が4部屋、いわば32畳が一室で、4年生の教室であった。しかし体育の時間は、学校に行き、校庭で竹槍を持って、兵士による軍事教練である。その時、何やらモタモタしていた級友のS君は、みんなの前に引き出され、何度もビンタ。その時、耳から血が流れていたが数日して彼は息を引き取った。いくら戦時中とはいえ、私に言わせれば児童を「殴り殺した」軍隊とは、一体何ものなのか？

終戦前後は超食糧難の時代。ある時私も手伝って父はサツマイモの苗床を造り、種芋を植え付けていた。翌朝私が苗床を見に行ったら種芋は全く無し。誰かに掘られて空っぽ。そしたら苗床の縁に、何やら置手紙。『私は隣町の疎開者です。どうかお許しください。』とあり、わずかのお札が包まれていた。父は怒るかと思ったら、私に隠れるようにして、涙をぬぐっていた。他人事ながら、子供の空腹に耐えかねた親心を、父は責める気にはならなかったようだ。

戦時中の「疎開」に関し、私共、田舎者にも、強烈な印象がある。東京とか、標準語とかは全く縁のない別世界の話。ところが終戦直前4月、疎開者として私のクラスに東京から、とても、言葉には云い尽くせない美人で、頭が良くて、綺麗な東京弁をしゃべるお姫様が舞い込んできた。村に唯一の医者の親戚とか。「掃き溜めに鶴が舞い降りた」…というが、正にこの事。

学制が変わり、中学から高校に進んでも、持って生まれた才媛は、ますます輝くばかり。永遠のマドンナである。今でも同級会の席では、男どもは彼女の周りに多数集まる。人妻ながら、淑やかで利発な高貴の花は我らの永遠の憧れ。独身時代、こちらは安月給のしがない公務員。一言も心の内を打ち明ける事ができなかった。何通も恋文を書いたが、ついに一通も発送せず。20代前半は情けなや、作文の練習期間？　俺に甲斐性と強い勇気があったなら、もしかして、高根の花に近寄れたかも…。今はただ、遠く幸せを祈るだけ。こんな大願を諦めるような男は、所詮大物には、なれはしない。引っ込み思案、劣等感の成れの果てが、現在のこの自分である。

＊

③ 17歳：肺結核と進路決定

人の運命はどう変わるかしれない。活気あふれる花の17歳が、闘病生活とは過酷な試練だ。高校2年の時、私は肺結核で1年休学。当時、結核は死病と言われ、まず回復は無理。青白く痩せて骨皮筋衛門。一家に結核患者が出ると、娘達は嫁に行けぬなど酷い時代。勿論、抗生物質などなく、安静と栄養のみが治療手段。

隣町の主治医は将棋2段。ほぼ同格の私と将棋を指すため、他の患者をホッタラカシ。院長室で将棋を指せる楽しみで、サボらず通院を続けた。しかし親に通院費を貰って家は出ていったが、時によっては病院には行かず本屋に行き、隠れて本を買って帰る「ろくでなし」。しかし、感受性の高いこの頃の読書が今日の私の基礎。

さて我が家は、米造り専業農家であったが、村の活性化を図り、戦後日本の栄養改善を目標、酪農導入事業に参加。山の木を売って資金を造り、北海道から初産妊娠牛を一頭購入。次々牛も増え、仲間達で小さな製酪工場を造り、牛乳、バター、チーズは飛ぶように売れた。それに我が家では鶏卵も豊富。その甲斐あってか、たちまち結核は回復傾向。わずか1年間の休学で復学できた。しかし主治医に、『高校卒業しても普通の労働は無理…』と言われた。いわば死に損ないの、進路やいかに？

実は隣町の獣医師が大型オートバイで、颯爽と診療に来る姿に私は日頃猛烈に憧れていた。しかし国立一期校の地元岩大獣医学科進学は至難の業。さりとて東京の私立大は金銭的に所詮無理。猛勉強を重ねありがたきかな合格。卒業・国家資格を得て、何のえにしか茨城県庁で行政獣医師に…。出先の初任地は石岡で、家畜伝染病との苦闘。そ

して結婚56年。定年退職後20年間働いて、今は3種のがん連発により闘病生活。家族や近所に支えられ、生きている。今思えば、病気もリスクとだけは言えない。多感な時代に、私のような鈍感人間でも、ある程度の「緻密な感性」を養ってくれたエポックともいえる。

＊

④　26歳～：結婚・子育て・孫育て

結婚とは人生で、多分、最大のイベント。それが何の縁（えにし）でこうなったかは、正に偶然の出来事。惚れた腫れたと浮かれた話でもなし。勿論誰かに強制されたものでもない。更に何かの魂胆があったわけでもない。ただなんとなく、なるようになった…という次第。

妻は母娘二人きりであった。結婚の時、家名が途絶えるので婿入りしてくれ…と強く要求された。当時私もひねくれ者だったのか、妻の隣家で妻の母の生家である「風間」なら「常陸風土記」にも名のある士族の家柄であるから、要求を聞いてもよいと思っていたが、残したい苗字は義母が嫁いだ東京の大きな割烹旅館の「横田」である。疎開で石岡へ。今は戦争で焼き尽くされ、何もない。父親はすでに亡し。お金は沢山あったようだが、そんな事はどうでもよい事。

妻は頭の回転は、かなり鋭い方。但し私の蔵書を読もうとしないのが残念。一方私の回転はかなり鈍重。コツコツ型の田舎っぺ。しかし勉強だけは、懸命にやってきたつもり。

人生は1割の遺伝と、9割の努力でおよそ決まると今でも信じている。

さて私の出自も、別に取り立てて名のある家柄でもないが、庄屋一族である。一応田舎ではそれなりに…。『菅原』姓にそれだけ執着する理由もないが、仕事の関係上、改姓は絶対不便。婿入り改姓なら結婚はしない。その一点張りで我儘を通した次第。義母の面倒は、必ず見ると約束し、大変心痛をかけたが、ゴールイン。許されよ！

東北地方に『菅原』姓が多いが、その起源は不明。しかし旧水街道市（現常総市）に、菅原村、菅原神社、菅原小学校が存在。菅原神社神職の説明によれば、平将門は菅原道真を崇拝していた。しかし道真は藤原時平の讒訴（ざんそ）により大宰府に流された。そこで将門は、道真の第3子「菅原景行」を学問指南役として迎えたが、中央政府により睨まれる。やむなく景行を真壁に匿った後、更にその保護を奥州実力者に依頼した。その子孫が、奥州菅原氏の発祥と聞く…との話。どこまで真実かは、不明であるが、時代考証は合致。単細胞の私は、菅原姓に拘り、その姓を簡単に失う気にはならなかった。

結婚にあたり、私自身に、もし不妊の原因などあれば責任重大と考え、日頃家畜改良増殖法による精液検査など習熟していたので、自分の精液の量、PH、精子数、活力、奇形率など検査し、種馬合格とみて結婚を決意した。そして妻とは、痩せ馬2馬力で、子育てや孫育てに励んだ。更に私も妻も、大した遺伝的良血とは言えないが、遺伝子の組み合わせが良かったのか、雑種強勢の所為なのか、かなり満足な子や孫が続出したのは、大きな喜びであった。

長女は石中3年の時、県下一斉の高校進学模擬テストで、県内同期37000人（17年度は2447人）の第1位であった。水戸一高もトップ卒業。3歳から10年間、ピアノの猛レッスン。先生が超素敵であったせいもあり、私も夢中で娘にピアノを強要。ところがある時，勉強の時間が不足するからピアノは止める…と娘が言い出した時には私はガックリ。ピアノこそ知能指数向上に最善と信じていたので、失望この上なし。しかし子供の決断は正しかった。

一方私が喘息持ちなので、良かったら医師になってほしいというのが、私の切なる願いであったが、決して強要はしない。しかし親の心をしっかり認識していたのか、医学部進学を決意してくれた。共通一次テストが非常に好成績だったので、水戸一高から、何が何でも東大理Ⅲ（医学）に進めてくれと何遍も言われた。しかし安月給の私では、東京でアパートを借りて…など金銭的に所詮無理な話。筑波大なら学生寮も完備。家から通う事もできる。自慢めいて恐縮だが、長女の博士論文（自己免疫）は、アメリカの内科学会が注目。招待され、アメリカでの学術講演を2回も行っている。

娘の夫は循環器外科医で「真田十勇士海野家」の末裔（猿飛佐助など架空人物もいるが、海野六郎は実在）。そしてこちらは常陸大掾家の分家、旧協和町小栗城「小栗十勇士・風間次郎正興」の末裔。共に市川猿之助により歌舞伎上演。何の縁か戦国武将の末裔同士の結婚。古文書や詳しい家系図は存在するが、省略する。

次に孫達は二腹合わせて5人とも全部「姫」。長女の長女は東大法科を目指していたが、結局早大法科卒。入社競争率1万倍を突破し現在テレビ局勤務。16年9月、ひ孫を生んでくれた。次女はこの春、医師となり、現在研修医。

さて我が家の長男は、県の行政・研究・医療職獣医師。茨城県で初めてのクローン家畜を作出。長男の妻は臨床検査技師。その長女（内孫）は、江戸取から現在自治医大3年生。僻地医療への情熱を持っている。内孫の次女は国際医療福祉大学看

護学科２年生。末っ子の現在高３は女ながら、なんとアフリカで野生動物保護の仕事をしたいとの事。女の子でもあんなガンコとは…。よいか悪いかは知らないが、ガンコは遺伝する？　何を好んでそんな危険な所を…と思うが、日頃、爺の環境保全・絶滅危惧種保護などの持論が結果として孫の人生を狂わす悪影響とならなければよいが…と念じている次第。

＊

⑤　28歳：喘息発作・死線をさまよう

父方・母方両祖父は喘息持ちであったという。しかし両親はなんでもなかったが私はこれまで２度激しい発作に苦しんだ。そして私の子供二人はなんでもないが、孫５人のうち二人が小児喘息。隔世遺伝なのか、飛び飛びに禍が伝わる。私は新婚ホヤホヤの28歳の時、県から派遣され３か月間、東京小平市にある国立の試験場へ、「病性鑑定」の技術講習を受けるため、国分寺市にある下宿先から毎日府中街道を２㎞ぐらい歩いて往復した。猛烈な排気ガス。現在の中国も多分同じ状況。研修も終わり石岡に帰ってきた途端、突然激しい咳込み。生まれて初めての喘息発作。今にも死にそうな苦しさ。隣家の内科医に命を助けてもらった。

もう一度は70歳の頃、風邪をひいているのにマスクもせず、趣味の日曜大工の跡片付け掃除をしていたら、突然激しい咳連発。長女のクリニックに駆け込み、点滴などしてもらい命が助かった。私はかなり室内の埃に弱い。それ以降絶対に風邪をひかない事。アレルゲンとなる埃を吸わない事。ステロイドの粉末（オルベスコ）を、毎日吸入する事など実行。しばらく安定状況継続。現在は、３種のがんによる強烈パンチで療養中。皆に多大の迷惑をかけている。

＊

⑥35～38歳：豚疾病全国調査の取り纏め役

日本経済は高度成長期で、畜産の進展も著しかった。家畜数が増えるという事は、それに伴う諸技術が随伴しなければ、大きな挫折が有りうる。案の定、養豚産業においても、多くの感染症が多発し、多頭飼育の効率を著しく低下させる。養豚産業を向上させるためには、まず健全な肥育素豚（もとぶた）を確保しなければならない。その為には母豚が丈夫な子豚を沢山産まなければならない。そこに立ちはだかったのが、人畜共通伝染病「日本脳炎」である。本病は人間のみではなく、豚にあっては、蚊により妊娠中に日本脳炎ウイルスに感染すると死流産や、哺乳不能の新生児を生み出す。ではその被害実態は全国でいかほどなのかを、国家プロジェクトとして、全国の家畜保健衛生所から国の指示により私の所へ報告が来てそれを取り纏め、学会報告する。国はそれに応じたワクチン製造を、製薬会社に命じる。電卓などない時代。夜12時頃まで毎日のように取り纏め残業。しかし日本になかった巨大なデータが纏まり、畜産発展に大きく貢献できた事は大変な喜びであった。日本脳炎と同様被害を起こす「豚パルボウイルス」が日本で初めて石岡市三村で発見されたのも大きな副産物。直ちにこのワクチンも開発され、大きな貢献とされ、国の特別表彰を受けた。

余談だが１９８５年つくばで科学万博の時、日本脳炎ウイルスを持った蚊が飛び交う筑波に、本病のない北海道や世界各地の客を呼び込む事は危険この上もない。しかしマスコミにこんな事が知れたら大問題。今だからこそ言えるが、私は県庁にいたので、財政当局と内密に予算を確保。つくば周辺の豚に一斉に日脳予防注射をし、豚で日脳ウイルスが増殖するのを防いだ。茨城が誇る霞ケ浦を「蚊棲みが浦」と揶揄する人もいる。

人畜共通伝染病は真に恐ろしいもの。獣医師なんて目立たなくともよい。陰で社会の役にたてれば、それで本望。

（続く）

夕顔によせて

伊東弓子

夏の終わりに夕顔が咲いた。我が家の軒に咲いた一輪、長年の願いがやっと叶った感動に浸りながら妹に感謝した。うっかりしている間に二輪目は、萎れてしまっていた。三輪目の美しさは夕暮れの中で寂しさ、哀しさを含んで私に「今も争いは絶えないのね」と、訴えているかのようだった。その後は咲かずじまいで蔓も葉も雨に打たれていた。

夕顔が咲かなくなって急に烏瓜を思い出した。今年は未だ見ていないね。あの花の不思議な姿に合いたくなった。犬の散歩で烏瓜の葉が一面生えている所があるのを思い出した。朝露を含んだ葉や蔓はとても若々しい。夏も過ぎようとしている今、どんどん咲いてもいい筈なのに、あまり若々しい姿に不安な気持ちだった。

夕方咲く花だから、夕方なら合えるかもしれないと、行ってみたが花は見つからない。蕾らしいものも一向に見つからない。ただただ蔓と葉が這い回っているだけだ。烏瓜って傍の木や草に絡んで延びていくんじゃなかったかと、自分自身に疑いの気持ちが起きた。

気になると態とでも行ってみたくなる。何かに

合えるような期待を胸に、好奇心を燃やしながら暗の中を出かけて行った。あの畑の先に灯が点っているようだ。近づいてみると、そこには白衣を纏った娘が立っていた。

憂いの表情、いや怒りを込めている姿だ。烏瓜の茂る奥は崖っぷちだ。その先に見える峰を見つめている様子だ。いつのまに昇ったか十六夜の月が明るく照らし始め、私も娘の見つめる先、館山城跡の峰に目をやって、戻した時にはもう姿はなかった。私の独りよがりな幻像だったのかと、思いながらあの娘の思いを想像してみた。

戦いに明け暮れた兵隊たちは、こんな夜は如何に過ごしていただろう。よく眠れただろうか。間もなく冬が訪れる。又男たちが兵に駆り出される。田畑が荒らされる。女たちは夫や父、息子、恋人を送り出し、どうやって日々の生活を送っただろう。尽きることなく繰り返されてきた争いは、人のいる所止むことはないのだろうか。

その後、通った時、草波のようにうねっている蔓に小さな花が沢山咲いたのが目に入った。小さな花が固まって咲いているその様は、兵士たちの家族のように集まって支え合っている姿とも思えた。草波の端の枯草に絡んでいる烏瓜の花を一つ見つけたが、既に萎れていた。あの晩の娘はこの花の精かもしれない。若大将の無事を祈っていたのだろうか。枯草に絡んでいたのは紛れもない烏瓜だった。草波のように生えていたのは烏瓜ではなく、毎日続く雨に打たれて白っぽく変わっていた。あの一輪の烏瓜が実ってくれることを願っている。

この通りは古い道の一つであった。神田坂を下ると、水戸や（水戸様が立ち寄られた家）、庄屋をした家、寺子屋をしていた家、風呂屋と昔の名残が忍ばれる。神田という屋号の家では、明治の初め頃、大井戸の御稗蔵の一部を払い下げて貰い物置にしたとか。東側の山の上に観音堂があって顔立ちの良い佛さまがいらっしゃる。子供の頃（昭和二十年代）の記憶では、坂を下った両側、山際の湿地には田があった。日用品を売る家も賑わっていた。今、浜通りには高崎唯一の水産物を扱う会社がある。

坂を上ったこの辺りは、桜塚とよぶ円墳がありこの辺一帯の地名にもなっていて、十字路を横切る市海道を境に手前が高崎、向こう側が上玉里となる。江戸時代の村境だ。先日、娘に合った崖っ淵は右側、三十メートル位下は谷津田、何でも人の話によると氷河期にでも削られ、押し流されて出来たんじゃないかとか、その勢いで深く削られて出来たのが深壺という地名のある所で、水の事故も多く地名にまつわる民話も残っている。又玉里御留川の漁場の一つだ。里へ行くには近くの急な坂（このまの坂）を下りて行く。市海道は奈良時代から、大井戸（大枝の津）と石岡（府中）を繋ぐ道だった。右へ曲がると小松の館跡（今は杉林）、館山城（今は生涯学習センター）へ、左は問題のごみ処理場へと続く。真っ直ぐ行くと小松館の子孫といわれるお宅の前を、照光寺へ通じる古い道が続く。この道沿いに薬師堂があったという（現在は県道沿いにある）。今は通る人もなくなって草が生い茂っている。谷津田を超える道もあったが、細い畔になってしまった。終戦前は、子供たちが尋常小学校へ通う道で寺内の雷電山を上り下りして行ったという。偶にお寺のお母さんに飴を貰うのが、楽しみだったと話してくれた人がいた。

子供の頃（昭和二十年代）は、下高崎へ遊びに行った道だ。娘の頃（昭和三十年前後）は、畑も山も生き生きしていて、道は人が確り歩いて固められていた。畑には溜桶があった。私は勤めをしながら、子育ての頃（昭和四十年代）、一人を負ぶい、二人の手を引いて歌を唄いながら通った道だ。

この近くに住んでいる棟梁さんが議員をしていた頃（玉里村時代）市海道を村道一号線と呼ぶようにいなったと話してくれた。館山城へ向かっていた市海道も途中から「見まい、聞くまいの坂」に変わり、現在、歩道付きの舗装道路にする作業をしている。多くの虫や生き物が森を追われ、水分を貯えて居た土や草木が姿を消していく。

昭和の始め、新しい時代を開いていく道があちこちに出来た。当時の青年会の若者たちの手で道標が立てられている。歩いて田や畑へ行くさく道も、山仕事に行く曲がりくねった山道も横切って新しい道が出来た。部落の人の生産、生活の道の名は薄れていく時期に入った。村の中心を西から東に走る紅葉石岡線も百里飛行場のために出来た道もその一つだ。私が高校へ通う頃（昭和三十年初め）両脇は高い土手の上り坂、家は坂下近くに二軒あるだけだった。三十年代中半、寺で農繁期託児所が出来た頃、四～五才の子と一緒に二才の子が高崎から歩いてきた程、車の数も少なく安心な道だった。三十年代後半になると、漁場の実家から坂の上に分家し始まった。そこに村内の勤め人が家を建て、一塊の住宅地域が出来ていった。ボタンの会社の社宅が出来たのもその頃。四十七年には、そこへ私たち家族も住むことになる。

松山部落を過ぎ、下り坂（良善坂）となる。左の小山は良善山といい、嘗てこの辺りは良善という地名だったという。開祖良善上人、中興見亮上人のお墓と共に、部室、松山のご先祖の眠っておられる所だ。その反対側にも三十軒近くの住宅が

昭和の終わり頃建った。烏瓜で思い悩んでいた所にも、分家した家のお墓が増えた。その前に家が四、五軒建ちそうだ。この辺り玉里では一番高い台地といわれているし環境もよいのだろう。今は人家と墓が近くても気にしないのかもしれない。道も家も人間のご都合主義で造られていくのが残念でならない。歴史も文化も生き物も踏み潰して、アスファルトが塗られ、コンクリートが建っていく。霞ケ浦にきれいな地下水を注いでいくことはもう出来なくなる。だって自然界を壊すことを何とも思っていないのだから。

夕顔、来年も我が家の軒に咲いてね。

県指定文化財（26）

兼平智恵子

豊かな自然と豊かな湖の恵みを受けて古代から栄えた石岡には先人達が懸命に生きた証として、多くの文化遺産が残されてあります。この文化遺産は文化財として指定制度に基づいて保存されています。

当会報一〇五号にて国指定文化財七件を紹介、そして県指定文化財紹介も今回の二六回をもちまして三八件となり終了となります。

それでは最後の紹介に入ります。

○片野排禍ばやし　　無形民俗

指定　昭三七・一〇・二四

片野といえば排禍ばやし、排禍ばやしといえば片野ひょっとこと言われるほど、古くから多くの人に親しまれて、片野八幡神社の祭礼の日に奉納されてきました。

八郷片野地区は常陸風土記の丘より車で約一〇分位の所に位置します。風土記の丘を左にして間もなく丁字路を左折、ふるさと農道に入ります。

鬼越峠を越えると、左側に茨城県畜産センター、まがりくねった道の山あいをぬけると、間もなく裾野を広げた雄大な三角形の女体山、その奥に小さな三角形、それは男体山です。右側に以前、当会報で紹介しました山県大弐の墓のある泰寧寺、急な左カーブ、右のビニールハウスを過ぎると右側に、まぼろしの加波山鉄道の跡が真っすぐに続いています。

更に前進。ふるさと橋を渡ると、片野の交差点。右折すると片野地区にはいります。

筑波山（男体山と女体山）と手前に小高い富士山（ふじやま）に抱かれて由緒ある佇まいの多い町並みです。この町並みから東に目をむけると真ん中をえぐられ、岩石がむき出しの龍神山が目に飛び込みます間もなく左側に幟を立てる二本の鉄柱があり、長い参道を進むと八幡神社が鎮座しています。

現在は毎年七月の第三日曜日の祇園祭と十月の第三日曜日の秋祭りの時に排禍ばやしが奉納されています。

神社前の説明板によりますと十六世紀末、片野城主　太田三楽が当八幡神社を建立した際、禍を排すため奉納した事を起源としたと伝承されている。

踊りは四番に区分される。はじめは獅子舞で武家の威厳圧制を示すという、品格のある踊りである。

二番目はおかめで、戦国時代の女性の忍耐とおおらかさを表現しているという。女形の踊りは巧みなしぐさとしとやかさで心和むものである。

三番目はきつね踊りで速いテンポ、力強さ、足さばき、リズミカルな顔の表現など躍動に満ちたもので、農民の生活力をきつねの狡猾さを通じて表現しているという。

最後はひょっとこでおどけた面の表情や酒脱なしぐさに観衆も引き込まれ、舞台にあわせて踊りの輪が境内に広がる。

緑豊かな里に生まれ、歴史の風雪によって磨きぬかれた伝統に輝く踊りである。郷土に誇りを持つ人々によって守り育てられなければならない貴重な民俗文化財である。

（平成元年八月）

楽器は大太鼓一個、小太鼓二個、笛二条、鉦二個で構成されています。各方面からの出演要請も多く勢力的に活動をしているそうです。残念ながら排禍ばやしを観覧することができませんでした。

今回、八郷地区の柿岡からくり人形、真家みたまおどり、そして排禍ばやしと、伝統を立派に守り続け引き継がれている事に感心感激でした。

来年こそおまつりに参加したいと思っています。

次回からは石岡市指定文化財をご紹介します。

・黄金どっさり野にひとり　柿の大木

・梅の木に赤い実あまた　カラスウリ賑やか

智恵子

大阪城に残る戦争の傷跡

小林幸枝

何度か大阪に行って大阪城にも見学に行ってきましたが、大阪城に戦争の傷跡があることは知りませんでした。たまたま大阪城の歴史についての資料を見ていたら、第二次世界大戦の時に爆撃を

受けたてできた傷跡のあることを知りました。さっそく大阪の友達に聞いてみたら、友達も知らなかった。

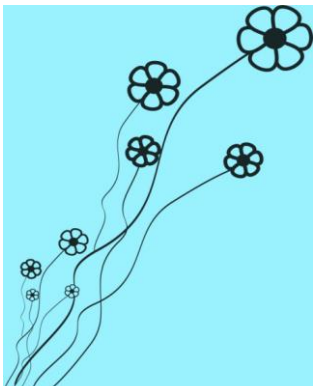
七十二年前に、米軍の爆撃機Ｂ29によって焼夷弾や1トン爆弾が投下され、その時に出来た傷跡が今も残されているのだそうだ。

明治維新以後、大阪城内の敷地は陸軍用地に転用されて敷地内には大口径の火砲を主体とするアジア最大規模の軍事工場「大阪陸軍造兵廠（大阪砲兵工廠）」がありました。

大阪大空襲で米軍の攻撃目標となり、終戦前日8月14日には約150機にも及びＢ29の1トン爆弾投下などの集中爆撃を受け壊滅的な被害を受けました。また、敷地内では二番櫓と三番櫓など多数の櫓を焼失し、この空襲で500～600人の犠牲者が出たと言います。

天守閣から北側にある山里曲輪石垣に残る機銃掃射痕がたくさん残っています。弾痕には直径30センチ程のものもあり、機銃掃射の恐ろしさを形で伝えています。

今まで何度か大阪城を見に行きましたが、戦争の傷跡があることは知りませんでしたが、今度行ったときには確りとみてきて、戦争の恐ろしさを伝えたいと思います。



【風の談話室】

《特別寄稿》

命の河を遡り

田島早苗

（9）過去からの声

加代は子供時代、親に甘えられなかったトラウマを引きずっているのか、人に優しい言葉を掛けるのが苦手で、心ならずも強い言葉使いに成り、ずいぶん損をしていた。思えば子供達も孫も、ほとんど加代に誉められた記憶が無かったが、その一番の被害者は健作の妻由美だった。

北濃の実家で大家族に囲まれて穏やかに育った由美にとって、加代の物言いは、恐怖だった。最初は加代に注意される度、オドオドと涙ぐむばかりだった娘は、加代の弟、三吉が惚れこんで「健作にぴったりのしっかり者だから」と仲人を買って出ただけあって、嫌な顔一つ見せず、こま鼠の様に働き、家中の信頼を集めるのに時間はかからなかった。

由美が加代の言葉に傷つき、涙ぐむ度に、「母さんは丙午の女だから、口は悪いが根は優しい、気にすることは無い」等と慰めるのは、何時も健三だった。健三は「儂だから丙午の母さんに食い殺されもせず連れ添うことが出来のだ」と折に触れては宣うのだった。

健三は、あれほど熱を入れていた小説も『子豚先生』を最後に書かなくなり、遅まきながら近所の人達と関わりを持ち始めていた。老人会の念仏講に参加したり、ゲートボールを楽しみ、対抗試合の選手に駆り出される程上達したが「勝負にばかり拘って面白く無い」と言い出しやめてしまった。齢をとっても相変わらずマイペースの健三だった。

以来パチンコにのめり込み、健康に悪いと心配する家族にお構いなく、せっせと足を運んでいたが、一度パチンコ店で倒れ、救急車で運ばれる騒ぎがあってからは、外出も控えめになり、自分の部屋で、イヤホンを付け、専用のテレビを見ることが多くなっていた。

更に「命の調節をしている」と言いつつ、ちびりちびりと酒を飲みながら、もう一つの趣味、時刻表の旅を楽しんでいた。先ず目的地を決め、時刻表を調べ、○○線の○○ホームから○○時発○○行きに乗り…と、きめ細かい旅程表を作っては、実際に旅をしている気分に浸っている様だった。

由美が家の大黒柱の地位を不動のものにするにつれ、加代も、由美の一生けん命にほだされ、家の事はすべて由美に任せ、孫たちの浴衣を縫ったり、女学校の同窓会に出たり、近所のお茶のみ仲間との交流を楽しみ、長田家に穏やかな時が流れ始めていた。

小姑にあたる娘三人は皆由美に頭が下がるばかり、それにも増して三人の亭主達は、誰もが由美さんフアン、女房の前で臆面もなく誉めまくってしまうほどだった。

長田家の全盛期には、毎年秋になると小さなマッタケ山を借り切り、従業員一同と早紀と和子の一家もご相伴に与かって、キノコ狩りが始まり、親睦を深めていた。

今は貴重品扱いのマツ茸だが、当時岐阜の山ではコツさえつかめば、面白いように見つけることが出来た。ひとしきりキノコ狩りを楽しんだ後、山の麓に莫蓙を敷き、マッ茸入りのすき焼きで打ち上げが始まると、宴は最高に盛り上がるのだっ

た。
　父母の金婚式には親族一同集まって長良川畔のホテルに泊まり、鵜飼船を借り切って、鵜飼の総絡みに酔いしれながら、金婚の祝宴を開き、皆そっと嬉し涙を拭うのだった。
　健作は早紀が俳句を始めたのが余程嬉しかったらしく、何か理由をつけては岐阜へ呼び、酒を酌み交わしながら俳句談議に花を咲かせ、早紀も先輩として教えを乞い、暗かった子供の頃を想い、胸が熱くなるのだった。
　北濃の『花奪い祭』・木曽三川の輪中に建つ『薩摩義士の顕彰碑』・『即身仏の寺』・『鵜匠の家』等々、数え切れないほど素晴らしい場所に連れて行ってもらい、俳句三昧の至福に浸る早紀と健作の幸せそうな笑顔からは、昔のわだかまりは完全に消えていた。
　親の金婚式を無事に済ませた翌年、地域の『岐阜市合併五十周年記念誌』を発行する企画が持ち上がり、健作が主幹を仰せつかったので、商売と俳句と記念誌の三本立てで大忙し。真面目で一本気の健作は、どれも手抜きできず、寝食も忘れるほど瞳を輝かせて、資料集めに東奔西走の日々が始まった。
　この地方が岐阜市に合併した昭和十年には、世帯数は四百三十二、人口二千四百四十六人、だったのが、五十年たってみれば、世帯数三千七百四十四、人口は一万一千十三人に増えていた。
農業と和傘作りが主要産業だった集落に、戦後、公共施設が出来始め、民間企業の進出も後を絶たず、娯楽施設や、飲食店が軒を並べる都市に変貌を遂げていた。
　早紀が小学生の頃、おむつを洗いに行った川は暗渠に成り、道路沿いに立派な家が建ち並び、見も知らぬ何処かへ来たような気がして落ち着かなかった。唯一早紀が子供の時遊びに行った御大尽の長塀だけは今も残り、実家へ帰る度、近くを歩いてみるのだった。
　県庁が近くに移転して、県立美術館が出来たのを境に、農村は近代都市に姿を変えた。五十年前、合併の話が持ち上がった時に一部の人々の反対運動が持ち上がったが、それらの人達や、不安を抱えながら合併に踏み切った村当局も、予想すらしなかった嬉しい誤算だった。
　家の大黒柱に成長した妻の助けを借り、地域の人々の協力と、編集委員に選ばれた若い力が結集してわずか半年と言う短期間の中で、古代の昔から掘り起こした地方の歴史と、地域の成り立ちと発展、文化、経済に至る人の関わりなどを網羅した素晴らしい記念誌が出来上がった。この取り組みを通じて人脈も広がり、健作は、一回りも二回りも大きく成長、深酒さえしなければ、感情をコントロール出来る様になっていた。
　女学校の同窓会を楽しみ、孫たちの顔を見に茨城までも出かけていた加代が、布団に躓いて転び、寝たきりに成ったのは年号が平成に変わって間もなくだった。
　早紀が見舞いに駆け付けた時「由美さんがこう言った：」等と不満を漏らす母親に「由美さんに世話になるのだから、可愛い御婆ちゃんに成って、何時も有難うと感謝しなさいね」等と説教を垂れ、甘い顔を見せられなかった後悔を長く引きずっている早紀だった。
　どうしても入院したいと自分から言い出し、間もなく病院に入った加代の認知症傾向が、入院を境に進行を早め、頻繁に見舞う和子の事さえ判らぬことがあると言う。
　明子が見舞い、「私は誰？」と聞いた時も、「茨城の人」と言って、はっきり名前が出てこなかったと言う。幸い早紀が見舞った時は、珍しく調子が良くて「早紀じゃ」と言いながら「パンが食べたい」とか「どうしてもお墓参りに行きたい」と駄々を捏ねるのだった。
　「〇〇先生が結婚しようと言って困ってしまう」と言ったり、誰かと話をしているらしい加代は、完全に過去の中で生きていた。
　毎日見舞う健作と由美だったが、健作は何時もそっぽっぽを向いていて、まともに言葉を掛けられなかった。由美が「私のこと分かる？」と言うと、「家で一番大事な人」と言って微かに笑顔を見せると言う。
　以前「お父さんの面倒は私が見させてもらうけど、お母さんの面倒は見たくない」と由美が漏らしたと聞いていた早紀は、「家の一番大事な人」と言う加代の言葉を聞いて胸を撫で下ろしていた。茨城の地で気を揉みつつも見舞いに行けないもどかしさの中で。
　平成四年三月に見舞ったとき、兄夫婦と相談して、「あれほど墓参がしたいと言っているから、何とか連れて行こう」という事に成り、医師の許可をもらって、車椅子の墓参りが実現した。何を祈っているのか真剣に手を合わせている加代の脇で、早紀はご先祖様に「早くお迎えに来てください」と祈っていた。とにかく早く楽にしてあげたいとばかり思う早紀は薄情なのだろうか？
　四月に成って健三が倒れ救急車で運ばれたと連絡が入り、再び列車に飛び乗った早紀だったが、加代と別の病院に入った健三を見舞うと、早紀の顔を見るなり、喜ぶどころか「帰れ、帰れ！」と回らぬ舌で叫ぶばかり、看病らしきことは一切さ

せて貰えなかった。付き添いさんの事も気に入らず、由美の顔を見ると「家へ帰る」と言って起き上がろうとする。自分で調整していたのに、脳梗塞で半身不随、悔しさで見も世もあらず、家へ帰りたいの一念に凝り固まっている健三だった。

一旦茨城へ引き上げた早紀を追いかけるように、加代が意識不明になったと知らせが入り、覚悟を決めて列車に飛び乗ったが、周りの事は何も目に入らず、「お母ちゃん、私が行くまで待っていて」と祈り続けていた。

加代は深い眠りに入っていた、呼びかけても、体を揺すっても全く反応が無かったが、「聞こえているから出来るだけ話しかけてあげて下さい」と先生に言われ、交互に呼びかけ、手足を摩り、心が届けと皆一生懸命だった。

加代の最後はローソクの日が燃え尽きた様に静かだった。人間の一生は誰でも波乱万丈と言われる通り、戦前、戦中、戦後の動乱期を一生懸命駆け抜けた母の八十七年、その生涯は幸せだっただろうか？「私がご先祖様に早くお迎えをと頼んだからこんなに早く…」とちょっぴり後悔しながら「でも、楽になってよかったね。色々あったけど、母さん〝終わり良ければ全て良〟だよね」と声かけながら涙が止まらない早紀だった。

それからが大変だった、みんなが入れ代わり立ち代わり健三を見舞いに行っては、加代のことを気づかれてしまうとて、何時も見舞っている和子が代表で見舞う事に成った。

ところが和子の顔を見るなり「婆さん亡くなっただろう」と言われ、戸惑っていると「婆さん昨日の夜別れに来た」と言い、愛しそうな顔をする健三に、長年連れ添った夫婦愛を感じ、真っ赤な目をして帰って来た和子。

加代は「爺さんが倒れて入院した」と聞いて、子供達の苦労を思い、いち早くあの世へ旅立ったと思えてならない早紀だった。最後に夫に別れを告げに行き、全く苦しまないで、静かな旅立ちの加代だった。

加代の通夜は子供達の啄木の歌で盛り上がった。皆が母の聞きかじりで幾つもの啄木を諳んじているのも驚きだったが、母の十八番の記憶もまちまち、互いに思い思いの抑揚をつけて披露しながら、在りし日の加代を偲び涙にくれるのだった。

加代が文学かぶれに成ったきっかけの三吉叔父は、長い闘病の末一足先に身罷っていた。胸の病と糖尿病で失明の危機、そして一番苦しんだのは頑固な不眠症だった。

刀掛けの日本刀が唯一の飾りの四畳半で本に埋もれて三年余り、文学に対する情熱は最後まで失わず、晩年は社会性川柳にのめり込んでいた。当時テレビにも顔を出していた売れっ子の川柳作家と親交を結び、ご丁寧な弔辞までいただくお付き合いだった。父留吉が惚れこんで迎えたしっかり者の嫁女に看取られ、穏やかな最後を迎える事が出来た。

〝富士山を切って捨てたい日本刀〟

いかにも三吉叔父らしい辞世の一句だった。

加代の葬儀はご当地育ちらしく多くの人に見送られ、盛大に終えることが出来、子供達も満足だった。

帰りの新幹線から見事な五月富士が見え、茨城へ来る度に「今日は富士山が見えた。何かいいことがありそうだ」と子供のように喜んでいた母の思い出に繋がって「母さん富士山がきれいだよ」と呟き、また涙、涙の早紀だった。

家に帰りたいとばかり言い暮らしていた健三は六月に退院、自宅療養に切り替わった。仕事と舅の世話に、二階と一階を行ったり来たり駆け回っていた由美さんの苦労を想い、病院でお世話になればと言う小姑たちの言葉に「お父さんだけは、最後まで私が看させてもらいます」と言い張る由美だった。

愚痴もこぼさず、何時終わるとも知れない介護の日々と仕事を両立させるべく頑張っていた由美さんが、ちょっと目を離したすきに、痰がのどに詰まって健三が窒息死したのは、加代が亡くなった年の十二月二十四日だった。この暮れの忙しい時に！と誰もが思ったけれど、マイペースを貫き通した健三らしい最後だと納得させられてしまうのだった。

子供達から見た父と母はあまり仲良しだとは思えなかったが、長年連れ添った二人だけの思いがあるのかもしれない。まるで母に呼び寄せられた様に突然逝ってしまった父を偲ぶ度、夫婦の絆が見えるようで、不思議な感動に浸ってしまう早紀だった。

健三の通夜には、念仏講の仲間が訪れ、参列者全員が唱和して賑やかな夜に成った。早紀は仏教青年の時に覚え、嫁ぎ先では役に立たなかった念仏を唱えながら、「こいつが男の子だったらなあ」と言う父の口癖を思い出していた。「何者にもならず、期待にも沿えなかったけれど、早紀はそれなりに幸せだから、安心して」と心で呼びかけながら、一段と声を張り上げるのだった。

父母を看取ると言うのは思ったより大変な事だった。色々後悔に苛まれ、不眠に陥っていた早紀だったが、

「父さんも母さんも、あの世とやらで、逢いたい人に会って思い切り楽しい日々を送っている」

と自分に言いきかせ、不眠の長いトンネルを抜けだすことが出来たのだった。（続く）

《読者投稿》
やさと暮らし（9）　さと女

・秋の日々、小さな資料館

園部公民館講座《里山ウォーキング》に参加した。その際に立ち寄った大場ぶどう園、敷地の中に小さな資料館があり、それは嘗て何処の家にもあった、懐かしい農機具が所狭しと保管されている。父の若かりし頃の姿が甦り、思わず胸がキュン。日が短くなり、朝晩の冷え込み、散歩道のサクラ並木もすっかり葉を落とし、寂しさが。そして秋の深まりを感じるこの頃です。日々の散歩道には、蕎麦や秋桜の花盛り、加えて今年は福神草の群生も多く見かけた。

・竹細工とエコクラフト

筑波山を眺めながら、吉生にある師匠の工房へ。今日は見学者が二人いて、竹ひご作りを教わっていた。私は蕎麦笊作りに悪銭苦戦、師匠は笑って、10個くらい作れば旨くなるよと慰めを。そして、材料の竹ひごを自分で作れないと言う。そうです、いつまでも材料を揃えて貰っていては前にススメマセン、宿題に真竹を一本持ち帰る。

友人からエコクラフトの籠を作りたいと電話が。今回は難しい編み方に挑戦、出来るか事前に編んでみた。竹細工でも教えて貰ったが、何とも面倒なくさい。穴のあくほど本を見つめ、何度もやり直し乍ら、やっと出来上がり、ホッとして眺めると、ちょっと違う。これは、花入れに使うことにした。友人は朝早くにやって来て、気が付くともう、お昼になっている、慌てて帰った。結局お茶も飲まずお喋りもせず2人で頭を悩ませる。次回は、完成になるかな？

・16夜の月

朝、晩の冷え込みが応える、夏の暑さが恋しい。近所から貰った苗木を植えたり、球根を植えたり、竹ひご用の竹に挑戦したり、一人で魂を摘めて作業をしていると、何となく人恋しさが。

喫茶オリーブへコーヒーブレイク、ほんのひとときタワイのない話をして家路に着くと、空にまあるく大きな月が、今夜は満月です。

柿が大分色づいてきた、秋が深まると八郷には，柿を求めて大勢の客がやってくる。我が家の渋柿は撓わに実っているが、干し柿を作るのはもっと冷え込んでから。今の時期は熟した渋柿をシャーベット状にして食べると、甘くて美味しい。戦時中・戦後と食べ物のない時に、この熟した柿を子供たちは競って食べたと姉が語っていた。此の事を思い出すから、姉はあまり柿は好きでないとも。

・散歩道

昨日気づかなかった事が今日は気づくと言う事がよくある。今日は真っ赤な烏瓜と柘榴が目に入った、するとこの樹は記念樹だよと。子供さんが中学卒業の時植えたらしい。その子どもも、今はもう40歳近くになる。としつきの経過は何と早い事か。

いつもの散歩コースを変えて坂道を昇る。コロちゃんはゼイゼイと息を切らし乍らグイグイと引っ張る。昇り切った所は豊後荘病院、そこから見る筑波山の姿が美しい、山から目を下に向けるとヤギが5頭、広い草原の中でのんびりと横たわっていた。最近八郷ではヤギをよく見る、飼ってる方が増えているのかな？まんまや（お蕎麦や）には黒ヤギさんがいる。

・落とし物

いつものようにコロちゃんと散歩していると、足元に真新しい茶封筒が。手に取ると名前の書かれた給料袋。嫌な拾い物を手にとってしまったな、と思ったがそのままにしておくわけにはいかない。丁度夫が帰って来たので、交番に届けにいく。交番で色々聞かれ、いざ、封を切ってみると、何と、中身は紙だった。夕方の貴重な時間、誰かに遊ばれたのかな？やれやれ。

・葡萄園、オカリナコンサート

アチコチにあった葡萄の直売所も、今年の販売は終わりましたという看板が。いつもの葡萄農家さんはどうかな、と思って行ってみると、まだありますよとの事。若い後継者が今年の天候にはまいりましたよ、とぼやいていた。庭で飼われているふくろうさんは今年も元気だった。ふくろうさんにとっては今年の天候は過ごし易かったらしい。見晴らしの良い山の中腹にある乗馬施設。満月の下で、寝転んでオカリナを聞こうと言う予定が生憎の空模様、急きょログハウスでのコンサートとなった。演奏者はお馴染みの野口さん夫妻、オカリナの音色が、ログハウスの中でとても良い響き。満員のお客さんも大満足でした。

・石岡ふれあいまつり1日目

朝から会場への巡回バスが行き交い、幸いに近

くの臨時駐車場から乗ることが出来た。一緒にバスに乗ったご夫婦は守谷から来たと,八郷には柿を買いに毎年来るとか。会場に着くと彼方此方からいい匂いが、私も並んで常陸牛やピザを食べた。ブラブラ歩いているといろいろな人にも出会う。その都度立ち話をして、それもイベントの楽しみだと思う。テントを覗きながらの買い物も楽しく次第に荷物も増えて。明日もふれあいまつり、雨になりませんように。

・石岡ふれあいまつり2日目

生憎の雨ですが、昼過ぎに出かける。友人夫妻と出会いブラブラと行動を共にする。あちこちの店を覗きながらの立ち食いもまつりならではの楽しみ、しし鍋や焼き肉が美味しかった。芝生広場の子供フェスティバルも賑わっていた。目的の一つのＥｒｉｋｏさんのコンサートも爽やかで心がこもっていてとても良かった.お天気は残念だったが、楽しい1日でした・。

・冷たい雨

窓を開けると今日も雨、しとしとと冷たい雨が朝から・・・。数日前からグリーンカーテン用の網にカマキリさんがへばりついている。寒くて動けないのでしょうか？　又、暑さ対策に植えたつる性の植物が今頃になって、次々花を咲かせています。金木犀は9月に続いて2度咲きして良い香りを放っていますが・・・何か変ですね。

先送りしていた骨折時に入れた、プレート除去手術の予約をしに病院へ。レントゲンを撮ってからの診察、そして手術の日が決まった。プレート除去だけなのに、全身麻酔との事。その為に血液検査その他いくつかの検査をした。２泊３日の入院らしい。

養生日記

堀江実穂

・某月某日

石岡の「けやきの家」でお世話になった先生が亡くなった。欅の家を退所してからも月に一度会っていた。昼食をご馳走になり、色々な助言や励ましを頂いていた。そのおかげで今の作業所でも頑張り続けることが出来たと思っている。

亡くなる少し前に、昼食をご馳走になり、色々とお話しくださった。その時には、具合の悪そうな気配もなく、いつものように笑顔でアドバイスしてくださった。

突然の知らせで気持ちが萎えてきてしまった。しかし、先生の優しい笑顔や話し声を思い出し、落ち込まないように頑張っている。

・某月某日

今月のこころの医療センターでの診察の時、主治医の先生から、都合で12月から担当医師が変わると知らされた。今まで一番信頼と安心の寄せられる先生だったのでちょっとショック。

30代の女医さんで、説明やアドバイスが分かりやすく、薬の処方も私の体質によく合っていて、絶対の信頼を寄せていた。今度の主治医の先生とはうまくやっていけるのだろうかと心配している。

・某月某日

同じ作業所に通所している友達に新しい就職先が決まった。デイケアーの時からの友達で、一緒にグランドゴルフ、カラオケなどに出かけていた。その友とはもう5年のお付き合いになる。

作業所を卒業し、新しく就職が決まることはとてもうれしいことなのであるが、今までは身近な人が就職が決まると、喜びよりも嫉妬する気持ちが先に出てきたのでしたが、今度の友の就職には心から喜べ、おめでとうを言える。

私も頑張って、就職できるようにしなければと、嬉しい励みがうまれてきた。

《風の呟き》
古今往来

打田昇三

現代の日本は一都一道二府四十三県に分けられているが明治四年（一八七一）十一月に「廃藩置県」が施行された際には三府七十二県であった。石岡近辺も茨城県と新治県に分かれていたらしいが明治二十一年四月に「市町村制度」が施行されて其の時に現在の茨城県に統一されたのかも知れない。「茨城」と言う名称は石岡から出たらしく現在でも石岡市に地名が残っており明治四十年代に出された「常総戦蹟」と言う本の冒頭にも「…茨城は今の新治郡石岡町…」と書いてある。

石岡は言うまでも無く、かつて大国であった常陸の国府が置かれて居た町であり、奈良時代には藤原宇合が常陸守で赴任して来る程の大都市であったのだが、淳和天皇時代（八二六）に国主が親王と定められ（常陸、上総、上野三国が親王任国となる）現地に来なくなった。つまり其の国の税収は全て皇族費用とされて、其の事務は大掾氏など地元豪族が執行したのである。会計監査などは行われない時代であるから美味しい仕事である。

西暦九百年代には承平・天慶の乱(平将門の乱)

が起こり石岡は綺麗に焼けてしまった。間もなく復興したで有ろうけれども、鎌倉時代には守護地頭の設置で律令制が崩壊してしまい、日本一と言われた石岡も辺鄙な地方都市になって一時期には街道地図から消されてしまったことがある。

なぜ「日本一」であったのかと言えば常陸国風土記にも書かれているように気候温暖で国土が豊かで耕地面積が広く、海山の幸に恵まれた大国の都であったから、壮大な国分寺なども建立されたのである。何よりも当時の日本ではまともなお医者さんが居た都市と言うのが奈良・京都の他は石岡ぐらいであったらしい。其れに加えて現代では全く情報は無いが近辺に温泉地があったのだと思われる。医療設備付きの温泉なら言う事は無い。

親鸞聖人は近くに何十年も住んでいたし、日蓮上人も身延山で修行し過ぎて体調を崩し、石岡で治療を受ける為に此方へ向かったらしいのだが、途中（東京都大田区池上）で亡くなったから現地に本門寺が有るのだと思う。

淳和天皇の時代（西暦八二六年）には朝廷が常陸国を「親王任国」と称して国守を皇族に限ると指定した。常陸の他に上総（千葉県中央部）と上野（群馬）が狙われた。皇族が増え過ぎて経費が足りなくなった為に、豊かな三か国を抑えたのである。しかし国守は貰うものだけ貰って現地には来ない。無責任な話で何の為の役職か分からないが、やがて次官の介（すけ）も来なくなる。

其の結果、大国だけに置かれた「大掾（だいじょう）職」に権力が集中する様になるのだが常陸国では一族の内紛（平将門の乱）に勝利した平貞盛が都に戻る為に弟の繁盛に大掾職を譲っていたので、その子孫が常陸国に土着することになる。

「石岡」という名称は明治二年からとされているが語源は不明らしい。現代だと唯一の山「龍神山」を採石の為に崩したので其の贖罪の為に名を残した…と言えるのだが？それ迄は「府中平村」と呼ばれていたらしい。かつて国府が置かれていたので「府中」は分かるが、「平村」は「平家（大掾氏）」に由来するのか、あるいは元禄年間に支配した「松平氏」に依るのか石岡市史でも断定はしていない。「平和」の「平」だと思えば良いのだが歴史的には「桓武平氏発祥の地」を残して置きたかったであろう？祖先の思い…と解すべきか。

変人ゆえ魅力あり

菅原茂美

このあいだ、何気なくテレビをかけたら、ドエライ人物が登場していた。北海道の小さな町工場でロケットを造っているという。植松さんという常識では推し量れぬ度量の大きな社長。

子供の時プラモデルを買ってきたら、父親に「プラモデルは買うんではなく、自分で作れ！」と言われた。それから自動車や飛行機の模型を自分でコツコツ作るようになったという。

クレーン用電動磁石が主力製品。傍ら、今は紙飛行機作りが嵩じて、遂に手作りで、実用間近いロケット製造に没頭しているのだという。

なぜロケットなのか？　それはジェット旅客機は空気中を飛ぶから抵抗があり、日米間を10時間もかかる。これをロケットにして空気のない超高空を飛ばせば、数時間で着くはず。

なるほど理屈はそうだ。そこで工員を雇うのに、社長は、理系ではダメという。理系は固定観念にとらわれ、発想が一定の枠を超える事ができない。とんでもない発想は頭から受付けない。工作手技は入社後、ベテランが教えるから、工員募集は、感性鋭い文系が良い。大事なことは、「トーク力」と社長は言う。どうせ流体力学とか大気圏再突入とかは、町工場では計算できない。そういう事は、専門家に話術力を使って教えを請いに通えば、学者は親切に教えてくれる。

工員募集なら文系から…。この話は私を直撃。理系一途に60年近く働いてきた。理系の科学的基礎を根拠に物事を考えるから、自分の主張に自信が持てる。誰に何と言われようが、揺るがない信念に裏打ちされる。それが理系は固定概念にとらわれ、ある型枠から抜け出せず、自由な発想が浮かばない…と言われるとギャフンとくる。しかし経営者の立場から見たら「それもあり…か？」「一人よがりだったのか？」といささか反省もしきり。人間がものを考えるのは脳細胞の活性によるもの。文人が脳細胞の微妙な分子生物学を知らずに、よくぞ文学作品が書けるものだ…と私は生意気に考えていた。即ち理系の「枠」を超えられずにいた事になる。

事をなすには、何事も失敗はつきもの。失敗がなくては、ろくな成功もあり得ない。部下が失敗をした時、社長の役目は、ふーんそうか…と微笑みを忘れない事。叱れば社員は委縮して、次の失敗ができない。即ち、より高度の成功は遠退くばかり。社長は、社員が失敗したら、次から「いかに安全に失敗するか」に気を配る事。そして社長たる者は、「じゃあ、こうしてみたら…」と高レベルのアドバイスを送ること。

この社長の次なるトライは、ＡＩ（人工頭脳）への挑戦。ＡＩの唯一の欠点は、「雑談ができない」事。老人施設など、色々のＡＩがあるが、雑談で孤独な老人を慰めるおしゃべりマシーンはまだない。

なるほど夢を広げればいくらでも広がるものだ。子供の夢は無限大。それを大事に育てていきたいものと、御大はいう。

そして『どうせ無理』と、物事を途中で諦める事が、この世で、一番惨めな事。そこまでやるのか、あいつ変人じゃないの？と言われる人に底知れぬ魅力を感じるのだという。

落ちこぼれそうな仲間を助け、みんなで目標に突進する、これがこの社長のモットーだという。

砂漠の塩

打田昇三

砂漠地帯では塩分を含んだ砂が長い年月を掛けて強風に吹かれ続け、固まって岩の様に成長するらしい。大きいものは人間の背丈以上にもなる。塩分が含まれているということは其処が元来は海であった…と言うことになるのであろうか。中東のイスラエル・ヨルダン両国に挟まれた地域に狭い平野があり其の中央部に「死海」と言う縁起の悪い名前の水溜りがある。此処の海水は塩分二十五％と濃く、人間は強制的に浮かされてしまう。魚類などは棲息していない。海抜で言うとマイナス三九四メートル、地球上で最も低い場所になる。砂漠地帯の塩柱も最初は死海のような海が隆起して取り残された現象であろうか。

死海周辺は名称からして何も産物が無いような地域であるが人類は偉大なもので、いつの頃からか周辺の大地に棲み付いた人々が苦労しながら農作物を生産しており、日本ほど明確では無いにしても春夏秋冬があるので一年を通してリンゴとバナナが栽培できると言う羨ましい話を聞いた。

かつて三笠宮が名誉総裁をされていた日本オリエント学会のテキストに依れば、凡そ一万年前に人類は中東地域で食糧生産（農耕・牧畜）を開始して、五千年前には文明（文字の発明、政府の組織、冶金術の開始）を達成したと言う。それらは「オリエント文明」と呼ばれ、其の刺激を受けてインダス文明、エーゲ文明、殷文明などが興ったとされる…のであるが、近年の国際情勢から考えると地球は砂漠の塩のように成長して固まるのでは無く、民族（国家）の対立と核武装化などで分解し続け破滅に至るらしい。それも一部の国の愚かな指導者の所為だとすると何とも情けない。

日々の風に

白井啓治

ブログを始めてもう七年になる。大震災の時と家を留守にしたとき以外は、休みなく書いている。書いていると言っても大したことは書いていない。日記とまでもいかない代物である。休んでの構わないのだが、始める時に兎に角毎日何かを書いておこうと決めたので、惰性的に書いている。

犬猫の3sと、庭に棲む蜥蜴たち、梅の木にやって来る雀らの事で日々が埋まっている。だが何かを書くために彼らと会話？を交わしているといろいろなことを教えてくれる。それらのことを十行程度の話しにして書き続けている。内容の重みなどはゼロである。

日々のごく狭い庭の範囲での付き合いであるが、3sも雀らも蜥蜴たちも季節の事や自然の知恵などを教えてくれる。

雀らは、今日の天気を教えてくれる。朝餌を撒いてやる時に、羽の膨らみ具合で雨が降るのか降らないかが分かる。天気予報では雨だと言っていても、雀たちが丸く羽を膨らませていないときは夕方近くまでは雨が降らない。洗濯日和の日などは雀の体は羽をたたんでいるので細い体になっている。雨が降る日でも雀らが羽をたたんで細身になっているときはかなり強い雨が降る。強い雨降りに梅の枝に止まっているときは、体をうんと細身に絞り、垂直に止まっている。雨の隙間を縫いながら、雨の当たる面積を狭めているのである。

雀らの行動で不思議なのは、毎日餌を撒いてやる庭石には決して糞を落とさない事である。餌まきの石を避けて糞を落とすのである。彼らも食べ物と糞が一緒になるのが嫌なようだ。

雀らに撒いてやる餌は、古い玄米なのであるが、新米が出て、精米した古米が余っているときに撒いてやると喰いつきが悪くなるのである。試しに白米と玄米を半々に撒いてみたら、玄米だけを食べて飛んで行ってしまった。白米の栄養価が低いことを知っているようである。

日中陽が高くなると、雀らの餌まきの石に蜥蜴が登って来る。初めはこちらの姿を見ると直ぐに逃げ出したのだが、最近では逃げ出すことはない。かなり顔を近づけても逃げようとしない。数年前から手乗りの蜥蜴を育ててやろうと挑戦しているが、手乗りにするには卵から孵ったときから育てなければ無理なようだ。

蜥蜴の首をかしげる様は、何とも言えぬ可愛らしさがある。子猫や子犬が首をかしげて見つめてくるのによく似ている。思わず手をのばしたくなる。

毎日のブログにはそんなことばかりを書いているが、こんな事でもボケ防止になるだろうと頑張るほどではないが書き続けているが、それも老後の遊びといえよう。

【特別企画】

打田升三の私本・平家物語

巻第七 - （一 - 3）

篠原合戦（しのはらかっせん）のこと

倶利迦羅谷の勝利に気を良くしたのか、木曾義仲は能登鹿島で近辺の神社・仏閣に領地を寄進すると発表した。白山には現在の松任（まっとう）市内の横江、鈴丸地区を、加賀大聖寺の菅生石部神社には能美の庄（小松市内）を、小松市の多田八幡宮には蝶屋の庄（美川）を与え、敦賀の式内社（平安初期に定められた格式の社）気比神宮には飯原（はんばら）の庄を寄進した。そして協力をしてくれた平泉寺には福井市藤島の七つの郷を与えるとした。大盤振る舞いをした訳であるが、義仲が没落してからどうなったか気になる。

その頃、治承四年に源頼朝が兵を挙げた石橋山の合戦で平家方に回った武士たちは、その後、都へ逃げ上り、平家に従っていた。主だった者は俣野五郎景久（またのごろうかげひさ＝大庭一族）、長井斎藤別当実盛（ながいのさいとうべっとうさねもり＝巻第五、富士川のこと、に登場）、伊藤九郎助氏（いとうくろうすけうじ＝「祐清」とも、曾我兄弟の叔父で頼朝の最初の妻の弟、頼朝に許され、本人の希望で平家軍に従ったもの）、浮巣三郎重親（うきすのさぶろうしげちか＝武蔵国に赴任した藤原一族から派生した武士団武蔵七党?）、真下四郎重直（ましものしろうしげちか＝武蔵七党の一つ児玉党の武士?）らであるが、彼らは根っからの平家武士では無いので、大きな合戦の起こるまでは暫く休業しようと申し合わせて、順番に酒宴を催すことにした。

斎藤実盛の所に集まった時に、主の斎藤別当が次の様に言った。「世の中の動きを見ると源氏が強くて平家は負け色が目立つようである。我々も、こうしては居ないで源氏方（木曾殿）へ参ろうではないか…」と言えば一応は全員が賛成したのだが、次の日に浮巣三郎の所に集まった際に斎藤別当が念を押すと、俣野五郎が「我らは東国では名の知れた武士である。形勢の利、不利で行く先を変えるのもどうかと思うので、私は平家に味方して成るように成ろうと思う…」と言った。

是を聞いた斎藤実盛は大笑いをしながら「誠は各自の覚悟を試す為に言ったので、此の実盛は今度の合戦に討死しようと決めている。二度と都へは戻らぬ心算で、其の事は大臣（平宗盛）にも申し上げている」と決意を述べたので他の者も是に賛同し、その言葉通りに此の者たちは一人残らず北国の合戦で命を落としたのは無残な事である。

その間に（敗戦の後）平家は人馬を休息させ軍を再編して加賀国篠原に陣を布いた。

其の場所は現在の石川県小松市と加賀市の中間辺りと思われる。寿永二年五月二十一日の朝、平家軍が未だ朝食を摂り終わらないうちに木曾軍が押し寄せて来た。平家方には畠山庄司重能、弟の小山田別当有重など東国武士が居たのだが、彼らは源頼朝が兵を挙げた為に平家に疑われ軟禁状態に置かれていた。然し戦場の体験が豊富な武士なので平家も思い直して「お前たちは前線に出て合戦の指導をせよ！」と北国行きを命じた。彼ら兄弟は三百余騎を率いて先陣に出た。

木曾方は今井四郎兼平が三百余騎で是を迎え討ち初めは五騎、十騎でテストを繰り返していたが、その中に両方が乱れ合っての合戦となり両軍共に汗みどろで死闘を繰り返した。其の日は旧暦五月二十一日、時刻は真昼の十二時頃であるから太陽が照り付けて暑い。合戦は手を抜けば負けるので汗を拭いても居られない。激戦の挙句、今井方も多くの兵を失ったが畠山は家の子・郎等が討たれて残り少なくなり力及ばずに其処を退いた。

次に平家方から高橋判官長綱が五百余騎で進み、是に対して木曾方からは樋口次郎兼光、落合五郎兼行が三百余騎で向かった。暫くは平家方が敵の攻撃を支えていたけれども主力が地元の兵では無く、各地から駈り集めた兵だった為に直接の戦闘は避けて我先にと戦場から逃走してしまった。高橋判官も心は勇んでいたけれど、自分に続く兵が居なくなったのでは戦場を離脱するしか無い。

只一騎となって落ちて行くところに越中の国の住人・入善小太郎行重（にゅうぜんこたろうゆきしげ）が良い敵を見つけたとばかり、全速力で近寄って来た。馬を敵の横付けにして組んで来たけれども高橋の方が強い。入善を捕まえて鞍に押し付け「君は誰だ？名を聞こう…」と言えば、少しタイミングはズレたが「越中国の住人、入善小太郎行重、生年十八歳」と答えるしかない。

素直に答えられると、高橋も首を取るのが気の毒になって「仕方がない。去年、死んでしまった我が子も生きていれば同じ歳であった。君の首をねじ斬って捨てるのは簡単だが、助けよう…」と言って放してくれた。高橋は馬から降りて平家方の武士が来るのを待つことにして、助けてあげた小太郎に話をし始めた。命拾いをした小太郎は礼の一言でも述べて、その場を立ち去るのが普通だけれども、合戦の経験も浅いし武士の礼義にも欠けているから、やたらと功名心に逸（はや）って自分を助けてくれた恩人を殺すつもりになった。神妙に話しを聞く振りをして、いきなり高橋の顔面を二回刺した。そこへ小太郎の家来が三騎、主人に遅れて来たので協力して四人掛かりで高橋を討った。如何に戦場とは言っても、

こういう卑劣な話は聞きたく無いと思う。
一方、平家方から武蔵三郎左衛門有国が三百騎ほどで喚声を上げながら攻めよせ、それを迎えて源氏軍は仁科、高梨、山田次郎などが五百余騎で防戦した。暫く戦っていたが、平家方の兵力が少ないから討死する者が多く、有国も深入りして戦う中に矢も無くなり馬も倒れ、徒歩で太刀を振るい敵を何人か倒したけれども自分でも七、八本の矢を受けて立った侭で討死した。一方の大将が、こう言う状況であったから、その部隊は壊滅状態になって生き残った者は戦場を落ちて行った。

真盛（さねもり）のこと

表題は短くなっているが、此の章段の主人公は「巻第五、富士川」に登場した東国の武士である長井斎藤別当実盛のことになる。越前が本国らしいが武蔵国長井（埼玉県妻沼）を領して源義朝に従い「保元、平治」の合戦に参加した。源氏没落後は平家に再就職したのだが、世の中は皮肉なもので源氏に仕えている頃に幼児の木曾義仲を救い比護したのが此の人物なのである。
前章段の「篠原合戦」で平家軍は総崩れとなり一斉に戦場から逃げて行ってしまったのであるが此の斎藤実盛だけは死を決意していたから、一騎だけで進退を繰り返しながら戦っていた。その出で立ちは赤地錦の直垂に萌黄色の糸で飾った鎧を身に着け、兜には派手な鍬（くわ）形の飾りを付けていた。太刀は黄金で装飾され、弓は滋藤（しげとう＝一寸五分間隔に藤弦を巻いたもの）、背負った矢は切斑（きりふ）と言って、鷲や鷹の羽で黒白の斑（まだら）模様が有るものを選んでいた。
馬は「倶利迦羅谷落」の章段に出て来た連銭葦毛に前後を金で装飾した鞍を置いて乗っていた。
平家軍は大部分が逃げてしまった戦場であるから其処に只一騎、派手な格好で頑張って居る武士は目立つ。木曾方から諏訪神社神官の一族で源氏の流れを汲む手塚太郎光盛が見つけて、先ず声を掛けた。
「お味方の軍勢は逃げて行かれたのに、只一騎だけ残って御出でになるのは誠に優れた武将とお見受けする。お名前をお聞かせ願いたい…」
すると実盛は「その様に言われる貴方はどなたであるか？」と逆に聞いてきた。「信濃国の住人、手塚太郎金刺光盛…」と答えると、実盛は「是は互いに良い敵である。然し貴方を見下している訳では無く、私に思うところが有って名乗ることが出来ない。先ず組打ちをしよう…」と馬首を揃えたところに手塚の家臣が駆け付けて来て、主人を庇（かば）うように組んで来た。
実盛は其れを受けて「あっぱれ！お前は日本一の武者と組んでいるのだぞ！」と言って敵を引き寄せ鞍の前に押しつけて首を斬った。手塚太郎は家臣が討たれたので実盛の左側から回り込んで実盛の鎧の垂れを引き上げ太刀で二回刺した。歴戦の勇者でも重傷を負っては体力も弱る。其処に組まれて一緒に馬から落ちた。実盛が弱ったところに手塚の家来が駆け付けて首を取ったのである。
手塚太郎は、その首を持って木曾義仲の前に駆け付け「この光盛が不思議な武将に出会い、組み打ちで首を取りましたが、此の相手は一般の武士かと思えば錦の衣装を身に着けており、大将軍かと思えば付いている家臣も居らず、名乗りを求めても答えず、声は坂東訛（なま）りでした」と言えば木曾義仲は首をじっと見て「あっぱれなる最後の様子からして斎藤実盛であると思われるが、それならば、此の義仲が幼い頃に上野国に行く時に会った年齢からして、既に後期高齢者の筈であり頭髪が白くなければならない。この首は未だ髪が黒々としていて、とても高齢者には見え無い。樋口次郎兼光が親しかったので、念のために見せてみよう」と言った。
呼ばれた樋口は、一目見た瞬間に「ああ、何とおいたわしいことか、これは間違い無く斎藤別当殿です！」言った。義仲は「それならば、今は年齢が七十を過ぎている。白髪である筈が黒髪なのはなぜであるか？」と問えば、樋口次郎はハラハラと涙を流し「その経緯をお話ししなければなりませんが、余りにも哀れで（実盛の心情が）不覚にも涙にくれてしまいました。弓矢取る身の覚悟として言い残すことは、きちんと残して置かねばならないのですね。私は斎藤別当に会って話をした際に〝六十歳を過ぎて戦場に向かう時は髪の毛や髭は黒く染めて若者のようにしようと思う。其の訳は若武者達と先陣を競うのも大人げ無いが、老武者と侮（あなど）られるのも悔しいから…〟と言っておりました。本当に、その様にしていたのですね。どうか髪を洗わせてからご覧下さい」と申し述べた。その様にして見ると斎藤実盛の首は白髪の首になってしまった。
また、将軍並みに錦の直垂を身に着けて居たことについては、斎藤実盛が出陣に際して最後の暇乞いに大臣（平宗盛）の許を訪ねた際に「私一人の所為では無いのですが、三年前に東国へ向かい富士川の合戦に臨んだ平家軍が水鳥の羽音に驚いて矢の一筋も射ることなく駿河の蒲原から逃げてきたことは此の実盛にとって老後の恥辱であり、此の度北国に向かうについては討死をする覚悟でおります。それにつきまして私は越前国の者ですが近年は武蔵国の長井に領地を頂いております。
譬えにも、故郷へは錦を着て帰れ！と申しますので

是非、錦の直垂をお許し下さい…」と願ったので、宗盛も「健気（けなげ）なことである」と錦の直垂を許されたと言われる。

昔の中国の話であるが朱買臣（しゅばいしん）は苦学して前漢の武帝に仕え故郷の会稽山に錦の袂（たもと）を翻（ひるがえ）し、今の斎藤別当は、武名を北国に留めたのである。然しながら朽ちもせぬ空しい名前だけを残して屍（かばね）は北陸道に散ったことは悲しいことである。

平家軍は去る四月十七日に十万余騎で都を発ち向かう敵も無いと思われていたのに五月下旬に都に逃げ戻ったのは僅か二万余騎である。是を評して「流れを尽くして漁（すなどる）時は、多くの魚を得ると言えども明年に魚無し。林を焼いて狩る時は多くの獣を得ると言えども、明年に獣無し。後を存じて（考えて）少々は残すべきものを…」と噂する者も有ったと言う。何と言われようと、既に平家が落ち目であることに変わりは無い。

（続く）

今月号は、11月4～8日まで、石岡市まちかど情報センターにて風の会展を行っていましたので発行が一週間遅れとなりました。お知らせもなく開催いたしましたが、お出でくださいました方には心よりお礼申し上げます。

編集事務局　〒315-0001
石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063
（白井啓治方）
http://www.furusato-kaze.com/

ふるさと風の会会員募集中!!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井　啓治　0299-24-2063　打田　昇三 0299-22-4400
兼平智恵子　0299-26-7178　伊東　弓子 0299-26-1659

ふるさと風劇団「ことば座」団員＆朗読教室生募集

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。

ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく（はげしく）心を演じることを言います。何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

月１回コース（受講料:￥6,000 円）　2回コース（受講料:￥9,000 円）

連絡先　080-3125-1307（白井）